

認知機能関与の遺伝子 発見

脳の中で記憶をつかさどる部分に多く見られる遺伝子が、記憶や認知機能に関わっていることを岐阜薬科大学の原英彰教授らの研究グループが発見しました。原教授らの研究グループは、脳の中で記憶をつかさどる「海馬」と呼ばれる部分に多く存在し、そううつ病などとの関わりが指摘されている、「DGK β 」という遺伝子に注目し、この遺伝子が正常な場合と、意図的に遺伝子をなくした場合とで、行動にどのような差が出るか調べました。マウスを泳がせた実験を行った結果、正常な遺伝子を持つマウスは、休憩場所を覚えてすぐに向かうようになるのに対し、遺伝子を持たないマウスは、なかなかたどりつけないことが確認されたということです。

結果について原教授は、この遺伝子が脳の中での記憶の形成に大きく関わっていることが明らかになったとしたうえで、「今後、この遺伝子の働きをさらに解明することで、アルツハイマー病など脳の機能が低下する病気の治療薬の開発も期待できる」と話しています。